

シンポジウム「加来彰俊先生のご業績と 思い出」：弘前大学での加来先生

三上, 章 / MIKAMI, Akira

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY / 法政哲学

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

35

(終了ページ / End Page)

43

(発行年 / Year)

2019-03-30

シンポジウム「加来彰俊先生の業績と思い出」

弘前大学での加来先生

「京都を離れて、遠く弘前の地まで逃げてきた」と述懐されたギリシア哲学の学徒、加来彰俊先生は、一九六五年、弘前大学人文学部文学科助教教授に着任され、一九六七年に教授になられた。その翌年の一九六八年、私は弘前大学人文学部文学科に入学した。哲学を学びたい一心であった。当時、図書館や講堂を含めまだ旧制弘前高校の校舎が残っており、新校舎と並んで使用されていた。単身赴任された先生は、大学の近くはかなり老朽化した公務員宿舎に住んでおられた。先生が弘前大学で教鞭をとられた期間は、一九六五年四月から一九七三年三月までの八年間である。その限られた期間の中で、入学から卒業までの時間を先生と共有することができたのは、盲亀浮木のまことに有り難いめぐり合わせであった。

三 上 章

1 哲学概論と波多野精一

一年次の春、私は先生の担当する「哲学概論」を履修した。教科書は、先生の京都大学時代以来の恩師である、田中美知太郎先生の『哲学初歩』（岩波全書）であった。哲学と宗教の関係についてのくだりで、『歎異抄』の「踊躍歓喜のころ」や「宗教には飛躍がある」というお話をうかがった。それに感動した私は、もっとお話を聞きたいという抑えがたい思いから、おそるおそる先生の研究室のドアをノックした。歓迎されたと思いだ私は、調子にのって長居した。「波多野精一先生の『宗教哲学序論』や『宗教哲学』を読んでいます」という話をしたところ、「そ

れはめずらしい」と興味を示してくださった。先生は学徒出陣の折、波多野精一の『時と永遠』を携帯されたところとである。その著作は私にとっても宝物であった。「今度、岩波書店から波多野精一全集が出版されるから、君も購読しないか」と勧めてくださった。私は喜んで勧めに応じた。これが先生との出会いである。

2 ギリシア語新約聖書読書会

私は大学入学と同時に、キリスト教の宣教師たちの影響で、大学の近くにある宣教師館で開催されていたバイブルクラスに通い、英語聖書を読むようになった。教会にも通い始めた。内村鑑三や矢内原忠雄の著作も読みふけた。そのうちに新約聖書をギリシア語原典で読みたいという気がわいてきた。キリスト者の先輩から教わった、新約聖書ギリシア語文法書や新約聖書希英辞典をたよりに、ギリシア語新約聖書を自己流で読み始めた。そのことを先生に話したところ、「よかつたら一緒に読みませんか」と勧めてくださった。先生の敬愛する田中美知太郎先生は、ポケット版のギリシア語新約聖書を愛用しておられたという話をうかがった。お言葉に甘え、毎週日曜の午後、先生の自宅にうかがい、『ルカ福音書』の読書会が始まった。「哲

学はぼくが先生だけでも、聖書はキリスト者である君が先生だから、何でも自由に教えてください」というお言葉をいただいた。それはお世辞ではなく、『聖霊』とは難しい概念だねなどと積極的に質問をなされた。日曜日の午前は教会の礼拝へ出席し、午後は先生のお宅にうかがうことが、私の毎週の楽しい慣例となった。先生は風邪の時でも、蒲団に入ったまま相手をしてくださった。というより私が遠慮をしなかったというべきである。

この読書会は、大学卒業まで続いただけではなく、その後も断続的に続いた。というのは、私は卒業と同時に、東京にある牧師養成学校に入ったが、幸いなことに、その翌年の一九七三年、先生は法政大学文学部に移ってこられた。おかげでギリシア語聖書読書会を再開していただくことができた。その後、一九七八年、私はオーストラリアのメルボルンにあるリドリー・コレッジというアングリカン教会の神学校に留学したため、四年間の中断があったが、一九八二年に帰国後、読書会を再開していただいた。毎週一回、法政大学へ行き、大学院のプラトン演習を傍聴したあと、先生の研究室でギリシア語聖書のお相手をしていた。『ルカ福音書』に続いて、『マタイ福音書』、『マルコ福音書』、『ヨハネ福音書』を読了し、『使徒言行録』の途中までお相手をしていただいた。通算一〇年以上になる

計算である。

3 独文の教授に対する一喝

大学時代のことに戻るが、私が所属する人文学部文学科は、二年次後期には三年次からの専攻を考えなければならぬ制度になっていた。私は西洋哲学専攻に決めていた。文学科の学生数はわずか六〇名であり、そのわりには教員数に恵まれていた。哲学専任教員だけでも六〜七名はおられたと思う。哲学を専攻する学生は毎年五〜六名であった。英文学や独文学を専攻する学生はもっと多かった。そのため、二年次の終わり頃には、先生たちによる「青田買い」が始まった。独文にゲーテを専門とする教授がおられて、有望な学生を見つけては訓練し、東大や都立大の大学院に進学させることに力を注いでおられた。私はゲーテに興味があったので、先生の『ファウスト』の原典講読に出席していた。そのうち、独文の助教から、「君は独文に来るのですか？」と暗黙的な勧誘をいただいたが、「いいえ」と答えた。すると今度は、教授ご自身から直接に「君は独文に来なさい。哲学専攻は語学のできない学生が行くところです」と言われた。このことをそのまま加来先生に話した。後から野町啓（のまち あきら）先生から聞いた

ところによると、「廊下で加来先生が独文の教授とやりあっていて、「三上君の意志を尊重してあげてください」と一喝なされた」とのことであった。ちなみに野町先生は、私に古典ギリシア語やキリスト教教父哲学を手ほどきしてくださった、キリスト教の学問の恩師である。先生から受けた恩義も山のようにある。

4 プラトンのギリシア語原典講読

話は前後するが、一年次の秋、ギリシア語による『ソクラテスの弁明』の演習に傍聴をゆるされた。二年次以上の科目であるため、正式の履修はできなかった。加来先生と野町先生が隔年で担当してこられた、田中美知太郎・松平千秋『ギリシア語文法』（岩波全書）の履修者のなかから、ついにプラトンをギリシア語原典で読む学生が誕生していた。その人は二年先輩の方である。演習は先生の研究室で行われた。テキストはオックスフォード古典テキスト版を使用し、毎回三頁の割合ですすんだ。先生は、「演習ではテキストをできるだけ正確に訳すことに専心すること。哲学的議論は家でやること」という田中美知太郎先生直伝のやり方を踏襲された。とてもまじめな先輩は、いつもLSJ・希英辞典やデニストンの *The Greek Particles* を入念に調べ

て、演習にのぞんでおられた。先輩が四苦八苦しながらテキストを訳すたびに、先生は「これなら藤沢君（※藤沢令夫先生）のところに出しても恥ずかしくない」と口癖のようにおっしゃった。私もいつしか先輩のようにほめてもらいたいと思い、乏しい財政のなかから「どやデニストンを捻出した。演習終了後、インスタントコーヒーを入れるのは、私の役目であった。そのたびに、「濃いめにね」といわれた先生のことを今でも覚えていいる。やっと『弁明』を読み終えたとき、先生は学生には高級すぎるレストランで私たちをねぎらってくださいました。食後に「欲しい本がありますか？」と聞いてくださりました。これも田中美知太郎先生直伝のやり方であった。洋書が高価だった時代である。私はバーネットの『バイドン』註解を買っていただいた。

二年次には、私も正式に演習に参加できるようになり、末席をけがすことになった。とはいっても、先輩と私の二人だけである。前期は『クリトン』を、後期は『ラケス』を読んでいただいた。入手困難であった高津春繁『ギリシア語文法』（岩波書店）を先生からお借りした。そこかしこに先生の書込がしてあった。返却を求められないことをいいことに、ずっと借り続け、今も手元にある。ついに先生の形見となった。

悔やまれるのは、もっと先生のもとで勉強しておくべき

だったということである。前述のように、一年次の春、私はアメリカ人・カナダ人・イギリス人の女性宣教師三人によってキリスト教に絡め取られ、大学の近くにある宣教師館に入り浸っていた。日本語があまりできない彼女たちのために、バイブルクラスや夏の英語キャンプなどで通訳のサポートをしていた。口の悪い友人たちから、「三上はキリスト教に取られた」とか、「ミカミはカミになった」などとひやかされたものである。大学に行くのは、加来先生と野町先生の演習の時くらいであり、たまに他の授業に出席したりすると、女子学生たちからめずらしいと笑われた。キリスト教の実践に加えて、ポート部に入っていた私は、日々、ウェイトトレーニングに多くの時間を費やしていた。そういうわけで哲学の勉強はあまりやらなかった。諸先生の温情がなかったならば、絶対卒業できなかったと思う。

5 学園紛争と人文学部学部長の加来先生

私の大学二年次は一九六九年にあたり、「学園紛争」（または学園闘争）の年である。私が住んでいた北溟寮（ほくめいりょう）にも、東大生が「オルグ」にやって来た。その人から「君は弘大生のわりには物わかりがいい」といわ

れ、素直に喜ばなかった。寮の主（ぬし）のようになっていた私の懇願に応じて、先生は「民青」の拠点状態になっていた寮に果敢に足を運ばれ、対話の相手になってくださった。先輩の寮生に生真面目な医学部の学生がおり、寮のお風呂で一緒にあったときなどは、「復活はほんとうにあるのか？」などとキリスト教に興味を示していた。やがてその人は私たちの前から消息を絶った。その後しばらくして、浅間山荘事件の報道のなかで、おぞましい実行にたずさわった一人として、彼の名前が報じられた。先生にその話をしたところ、もちろんこの人を知っておられ、彼が消息を絶つまで懸命に説得の努力をされたとのことであった。おりしも先生は人文学部長であった。理事會側と学生闘士側のどちらにも安易にくみしない先生は、団交に次ぐ団交のなかで大変苦勞された。ご心勞のあまり「歯が全部抜けた」とうかがった。授業ポイコットに同調する教員も少なくないなかで、加来先生と野町先生は、肅々と授業を続けられた。授業に出席する私などは、「ノンポリ」と呼ばれた。

野町先生も体調を崩された。奥さまから、手術の輸血のためにA型の血液が必要なので、助けてほしいという連絡をいただいた。幸い私も同じA型であり(？)、他にもA型の寮生四〜五名を率いて、さっそうと弘前大病院に向

かった。輸血の前に血液検査が行われ、看護師さんから「バカね。あなたはB型よ」といわれて、拍子抜けした。

6 アウグステイヌス『告白』(Confessiones) のラテン語原典講読

三年次の夏休み前のことである。ギリシア哲学よりもキリスト教の勉強に興味をもっていた私は、『世界の名著〈第一四〉アウグステイヌス(一九六八年)』の山田晶『告白』を読んだ。その内容のすばらしさはもちろんだが、日本語訳の美しさに感動した。そのことを野町先生に話したところ、京都大学における山田晶先生の学究生活について詳しく講釈してくださった。感動を加来先生にも伝えたいと思い、先生の宿舎に向かった。いつものように予約なしに押しかけた。私の顔を見るなり、「しまった」とおっしゃるので、「どうしたのですか？」と聞くと、「明日の授業の準備がまだ終わっていない」とのこと。私は「そんなことは気になさらないで、夜を徹してお話しましょう」といった。よくそんなことを言えたと思う。「『告白』をラテン語原典で読むなら、さぞすばらしいことでしょう」と申し上げたところ、「夏休みにラテン語文法を勉強してきたら、秋からラテン語講読の相手をしてあげよう。ぼくもし

ばらくラテン語を読んでいないので、読んでみたい」と励ましてくださった。それに力を得た私は、夏休みを返上して、松平千秋・国原吉之助『新ラテン語文法』（南江堂）を学習した。約束通り、秋から課外学習として *Confessiones* の講読が始まった。 *Magnus es, domine, et laudabilis valde*. 「主よ、あなたは偉大です。大いに讃美されるべきです」という冒頭の句に陶醉したことを、今でも忘れることはできない。私の他に一人の女子学生が講読に参加したが、この人はやがて私と結婚することになる。四年次には、先生はこの講読を正式履修科目とし、単位取得の便宜をとりはからってくださった。

このようにしてギリシア語新約聖書読書会、ラテン語アウグスティヌス講読、そしてプラトン演習というふうには、キリスト教の実践とウェイトトレーニング以外は、私は加来先生に入り浸りだった。当時はそのありがたさがよくわかっていなかった。ある日、先生から呼び出しを受けた。「事務から君が授業料を滞納しているという連絡を受けた」といわれた。洋書の買はずぎのため授業料を滞納していたのである。叱られると思った。ところが思いもよらず、先生の口から出た言葉は、「困っているならばくが立て替えてあげようか」であった。さっそくお金をかき集めて、授業料を納めた。会計課の窓口をなぜかありありと覚えている。

7 卒業論文

三年次の前期からは、演習で『パイドン』を講読していた。ただくことになった。当時、人文学部にはまだ大学院課程がなく、「専攻科」という一年コースが新設されたばかりであった。講読の参加者は、その専攻科に進学した例の先輩と私の二人であった。相変わらず一所懸命予習してくる先輩を、先生は「これなら藤沢君のところに出しても恥ずかしくない」と励まし続けた。四年次には、先輩が専攻科を卒業したので、私一人だけになった。さぞかし先生の意欲は下がったことであろうが、真剣に相手をしてくださった。

三年次の秋になり、そろそろ卒論のことが頭にちらつきはじめていた。私は、イエーガーの『初期キリスト教とギリシア哲学』の翻訳者である、野町先生の哲学特殊講義で、キリスト教教父哲学を教わり、特にオリゲネスに関心をいだいていた。ご指導により『原理論』や『ケルソス駁論』を読み始め、関連する資料などを収集していた。卒論はオリゲネスにするつもりであったが、あるとき野町先生から「加来先生がお呼びだよ」といわれた。先生の研究室に行く、「昔の哲学の学生は、君のように筋骨隆々では

なく、青白い顔をして哲学に勤しんだものだ」といわれた。「プラトンという太陽がさんぜんと輝いているのに、いきなりキリスト教神父哲学に飛び込むのはいかがなものか。まずプラトンから始めるのが順当だと思う」ともいわれた。ありがたいアドヴァイスである。野町先生も同意してくださった。こうして卒論はプラトンへ方向転換となり、私なりに『バイドン』の学習にもっと力を注ぐことになった。卒論の題目は、『イデア原因論―第二の航海―について』であった。『バイドン』のテクストの末尾に、「一九七二年三月四日、午後四時、加来先生の研究室にて読了」とある。四年次後期の授業期間が終わっても、卒業の間際までお相手をしてくださったわけである。

8 牧師養成学校に入る

私は一年次にキリスト者になってから、将来は牧師になりキリスト教を広めたいという思いがふくらみつつあった。その結果、大学で学ぶ時間と同じくらいの時間をキリスト教的活動に使うようになっていた。大学院に進学してプラトンとギリシア哲学の研究をしたい思いもあったが、牧師になりたい思いがまさった。四年次の秋に、卒業後は牧師養成学校に入る決心をした。キリスト教に染まってい

た私のことであるから、先生に対して、「哲学は人を救いません」のような暴言を吐いていたのではないかと思う。卒業式も終わり、牧師養成学校に入るためにいざ上京というとき、先生は私にこういわれた。「思う存分キリスト教の勉強をし、よい牧師になってください。しかし、君は四〇歳を過ぎるころに、哲学に戻ってくるのではないかと思う」。なぜかその言葉は私の心の奥深くに沈殿した。

9 プラトンへの情熱の再燃

やがて先生の「予言」は実現した。大学卒業後、牧師養成学校へ行き、その後約二〇年間キリスト教の実践に没頭することになったが、四〇歳を過ぎたころ、私の心のなかくすぶっていたプラトンへの情熱が一気に燃え上がった。その情熱は抑えがたく、ついに四三歳のとき、プラトンとギリシア哲学を正式に学ぶために、東京大学大学院の西洋古典学科に入ることになった。牧師をするかたわらの大学院生である。ありがたいことに、入学オリエンテーションの日には、先生が同伴してくださった。危険な場所ではないかと心配されたのかもしれない。

プラトンへの復帰には伏線があった。私が上京した年の翌年、一九七三年、先生は法政大学に移ってこられた。

さっそく先生は、ギリシア語によるプラトンの演習を始められた。そこで牧師養成学校在学中の私も、はせ参じた。当時、法政の大学院生のなかには、ギリシア語で読める人はいなかった。院生を励ます親心からだろうと思うが、先生は、ギリシア語で読めない人は院生であつても、「傍聴」という方針をとられた。したがつて日大の向坂寛先生や若輩の私のような外部の者が、演習にあづかった。私の見るところでは、これに発憤した院生のなかからギリシア語を学習し、ギリシア語で演習に参加する学生が徐々に出てくるようになった。前述のように、私は、一九八二年に留学

から戻り、加来先生の研究室でギリシア語聖書讀書会を再開していただいたが、そのついでに大学院の演習も傍聴させていただいた。このたびはギリシア語で読む院生が有つていた。奥田さんや白根さんたちである。

ご一緒に弘前公園を散歩したこと、文京区民会館にオラトリオ・メサイ



1975年6月 明大前のキリスト教朝顔教会にて、小生の結婚披露宴で祝辞を述べておられる加来彰俊先生

アを聴きに行ったこと、NHKホールで古典ギリシア語による『オイデュプス王』を観劇したこと、野町先生とご一緒に私の結婚式にご出席を賜り、身に余る祝辞をいただいたこと、留学の前にご自宅で食事と饞別をもって歓送してくださったこと、私の担当する教会に拙い説教を聴きに足を運んでくださったこと、富士山麓の別荘にディオゲネス・ラエルティオスの翻訳に奮闘中の先生をお訪ねしたと、寝屋川のご自宅にうかがうたびに、先生はタクシー代を出すと主張してゆずらなかつたこと、二〇一五年九月、最後にうかがつた折には、タクシーを運転するご息を呼び、私の行き先である京都のホテルまで送るように手配をしてくださつたことなど、先生との思い出が走馬燈のように駆け巡る。私ごとで恐縮であるが、学位請求論文の提出先がなかなか見つからず困つていたが、幸いなことに筑波大学に提出する道が開かれた。提出までの過程の中で、加来先生と野町先生から終始温かい励ましをいただいた。不肖の弟子は、最後の最後まで恩師たちから面倒を見ていただいた。

昨年の五月二四日に野町先生がなくなつた。そのことを加来先生に手紙でお知らせしたところ、六月七日付けの返信をいただいた。それにはこう書いてあつた。「野町先生がなくなつたとの便りをいただきました。あまりにも

突然の報せで驚くばかりで言葉もありません。告別式に出られてお見送りされたとのこと、よくなさいましたね。泉下で先生も喜んでおられることと思います。私はどうすることもできないので、コチヨウラン一鉢の供花と奥様にお悔やみ状を書いておきました」。その後、一月ほどたった七月一八日、野町先生を追いかけるかのように、加来先生はこの世を旅立たれた。いまごろは、幸いな場所でソクラテスやイエスとの問答を楽しんでおられることと思う。私も自分の旅立ちの日が来るまで、二人の恩師が歩まれた足跡を及ばずながらたどり続けたいと思う。